

### 3 高齢者下垂体腫瘍の治療の実際

米岡有一郎・渡邊 直人・藤井 幸彦

新潟大学脳研究所脳神経外科

【背景】平均余命の延長による高齢者人口の増加に伴い、経蝶形骨洞手術を考慮すべきトルコ鞍部および傍鞍部病変を有する高齢症例に遭遇する機会が増えている。内視鏡下経蝶形骨洞手術（eTSS）は低侵襲であるため、80歳を越える患者が手術適応を有する場合も増えている。

【目的】当科における80歳を越える患者に対する内視鏡下経蝶形骨洞手術の安全性および有効性について検討する。

【方法】2012年以降、当科で施行されたeTSSのうち、80歳を超える患者に施行された症例を抽出し、実態を後方視的に検討した。

【結果】2012年1月から2013年10月まで、当科で施行されたeTSSはのべ109例であり、平均年齢50.8歳（12-92歳）であった。うち80歳を超える患者は6例であり、男性2例、女性4例、平均年齢83.8歳（81-92歳）であった。症例の内訳は、非機能性下垂体腺腫3例、ラトケ嚢胞1例、脊索腫1例、髄膜腫1例であった。摘出（積極的減圧）目的が3例、主に生検目的が3例であった。摘出目的の3例、下垂体腺腫2例、ラトケ嚢胞1例では、視路減圧が実現され、自覚的視野改善を得た。生検目的の3例（下垂体腺腫1例、脊索腫1例、髄膜腫1例）では生検目的は達成された。6例全てが全身麻酔で施行され、平均手術時間は2h49m、平均麻酔時間は4h52mであった。ラトケ嚢胞の1例で、麻酔からの覚醒時に冠攣縮性狭心症を経験するも、1時間で緩解した。髄膜腫の1例では、胃原発悪性リンパ腫の既往あり、合併する下垂体機能低下、重症糖尿病、腎機能障害、水頭症進行、胸椎圧迫骨折から多臓器不全にいたり生検後3か月で死亡した。これらの6例で手術関連合併症は存在せず、eTSSによるADL低下は認めなかった。

【考察】eTSSは、80歳を超える高齢者にも、ADLを低下させずに施行可能ではあるが、高齢者ゆえの全身状態および合併症に留意が必要である。

### 4 HCG/FSH療法にて2児を得た男子低ゴナドトロピン性性腺機能不全症の1例

津田 晶子・涌井 陽子・荻原 智子  
原 昇\*

木戸病院糖尿病内科  
新潟大学医歯学総合病院泌尿器科\*

【主訴】拳児希望、家族歴無し。

【現病歴】生来二次性徴発来欠如と外性器発育不良あり。2003年7月石川県A病院受診。外性器 Tanner 1° テストステロン 25ng/dl LH < 0.2mIU/ml FSH 0.3mIU/ml と低値。嗅覚異常なし。MRI 異常無し。染色体異常無し。週1回 HCG 5,000u 注射開始。2006年3月テストステロン 79ng/dl と反応不良だが、「女性に間違えられなくなった。ED改善」などの効果があり。転居にて2006年3月末新潟県B病院転院したが、5か月後治療が不要と言われ治療終了。同時期結婚。

2008年12月治療再開を希望し当院初診。Testis 高度に委縮し精子数ゼロ。下垂体負荷試験にてゴナドトロピンのみ低反応。週3回の HCG・r-FSH 併用療法を開始しテストステロンは速やかに正常域に上昇、8か月後に精子形成確認、18か月後に自然妊娠成立、更に22か月後には第二子誕生した。治療開始年齢が遅いためか骨粗鬆症の改善は不良であり今後の課題である。

### 5 重症アトピー性皮膚炎に合併する電解質異常についての検討

西崎 淑美・阿部 裕樹

新潟市民病院小児科

重症アトピー性皮膚炎に伴う電解質異常の病態は十分に解明されていない。17年間に当科で経験した5名につき検討した。

全例で高K性代謝性アシドーシスを来しており、尿細管性アシドーシスIV型の病像と一致し、背景にアルドステロン不応性の存在が考えられた。重症アトピー性皮膚炎に伴う電解質異常では、偽性低アルドステロン症I型と類似の病態が

示唆されているが、自験例では腎からの塩喪失は認めなかった。Anand等は、腎外性の水分とNaの喪失により、二次的にアルドステロン不応状態となり高K血症が生じる機序を報告しており、自験例もこの機序で説明が可能である。また、電解質補正後でもアルドステロンの分泌亢進を認め、電解質異常を代償している時期があると考えられる。よって、アルドステロンは重症電解質異常への進展予測に利用可能と推測される。

## 6 糖尿病における血管内皮細胞障害の検討

谷 長行

県立がんセンター新潟病院内科

トロンボモジュリン (TM) は血管内皮細胞に発現するトロンビン受容体で、血管内皮細胞障害で血中濃度が上昇する。糖尿病患者における血中TM (sTM) 測定の意義を解説する。

- (1) DM患者の約半数でsTMが正常上限値 (Mean + 2SD) を超えている。
- (2) 合併症進行例でsTM高値例が多い。
- (3) 細小血管症の無い患者でもHbA1c (JDS) 6.0%以上でsTM高値例が見られる。
- (4) 短期的な血糖改善ではsTMは低下せず、年単位の改善でようやく低下する。
- (5) sTM高値例では冠血管障害の頻度が多く、マーカーとなり得る。
- (6) sTM正常例では5年間の観察期間も安定した推移を示し、特に血糖良好例は正常範囲に留まった。一方、sTM高値例では変動幅が大きく、血糖改善例でのみsTM正常化例が見られた。
- (7) 血流改善や血小板機能亢進を是正する薬剤の効果を検討した。結果、アスピリン、シロスタゾール、EPAの4週間投与でsTMの低下が見られた。
- (8) ARIの12週投与ではsTMは変化しなかった。
- (9) スタチン投与でもsTMは低下が見られた。

## 7 糖尿病患者における冠動脈CT所見について

星山 彩子・星山 真理

柏崎中央病院内科

糖尿病患者で冠動脈CTを撮影した症例について、その所見、有用性や、治療のアウトカムなどについて検討した。

【対象】2013年1月～9月の間に、外来にて冠動脈CTを撮影した、冠動脈疾患既往のない2型糖尿病患者30症例。

【結果】CT上有意狭窄を認めた症例は16例 (53%) であった。石灰化病変は19例 (63%) に見られた。

冠動脈CT上有意狭窄を認めた16例のうち、11例がCAG施行され、うち4例にPCIが必要であった。CT上所見があつてCAGで有意所見を認めなかった7症例について検討すると、石灰化が強い、画像不良、冠動脈低形成などの要素があつた。

【考察】今回の対象患者では、冠CT上高率に有意所見を認めたが、実際にPCIまで進んだ症例は少数で、冠CTとCAG所見に乖離を認めるものも多かった。特に石灰化病変はCT-CAGの乖離の原因であった。どのような糖尿病患者に冠CTを適応とすべきかは、今後症例の蓄積が必要である。

## 8 Propranolol投与にて心不全を来したBasedow病の1例

鈴木 達郎・植村 靖之・鈴木亜希子  
北澤 勝・鈴木 浩史・皆川 真一  
山田 貴穂・羽入 修・曾根 博仁

新潟大学医歯学総合病院内分泌・代謝内科

症例は45歳、男性。4年前から健診で不整脈を指摘、3年前から動悸を自覚していた。X年6月頃から動悸の増悪などを認め近医受診。TSH : 0.01 $\mu$ IU/ml, FT3 : 9.53pg/ml, FT4 : 4.14ng/dl, TSHAb : 40.9%とBasedow病を認め当院受診。初診時HR120回/分程度の頻脈性心房細動を認